

建築写真家としての永年にわたる建築界への貢献と 写真集『日本の民家 屋根の記憶』の刊行

大橋 富夫 殿

大橋富夫氏は写真家を志して上京した 1960 年、建築家であり日本大学教授であった西川驍氏の勧めによって建築写真を手がけることとなり、大橋富夫建築写真事務所を設立、以来、五十年にわたってフリーの建築写真家として数々の業績を挙げてきた。

雑誌『建築文化』を中心として現代建築の撮影に携わり、同誌や『商店建築』等に作品を掲載してきた。黒川紀章を始めとして、安藤忠雄、石山修武、伊東豊雄、坂本一成、長谷川逸子、原広司、山本理顕氏等々、日本の戦後建築、現代建築を形成してきた代表的建築家の作品を記録し続けている。建築写真を担当した『現代和風建築集第五巻』(1985)、『花数寄』(1991)、『建築の詩』(1993)、『空中庭園 = 連結超高層建築 1993』(1993)、『住まいの近景・遠景』(1994)、『新しい京都駅』(1997)、『札幌ドーム』(2001)、『建築：非線形の出来事』(2003)等の書物に優れた作品を発表した。

こうした現代建築の記録のほかに、主として 1960 年代に、鹿児島県奄美大島から岩手県水沢に至る広範な地域の民家の記録を精力的に行った。この記録を 2008 年に『日本の民家 屋根の記憶』と題する写真集として出版した。記録対象は農村、山村、漁村、宿場町、町などに建つ住居の主屋や蔵、舟屋、覆い屋等の仮設的建築、集落の家並み等を含んでいる。さらにこれらの写真は、建築はそこに展開された人々の生活の表現なのであるということを実感させてくれる極めて芸術性の高いものである。

ここに記録された民家のほとんどは現在消滅してしまっており、この書物の出版は、ほとんど失われてしまった多様で豊饒であった我が国の民家建築、ヴァナキュラー建築の民衆の生活に基づいた造形デザインを、我々や後生に伝えることを可能にした極めて貴重かつ重要な業績である。その意味で、平山忠治著『民家』(1962)、二川幸夫著『日本の民家(新版)』(1980)の二名著を補完する業績である。

建築は他の芸術とは異なってより社会的な存在であり、また生活文化に直結した芸術である。従って社会的変化、生活様態の変化によって建築に求められる機能が大きく変化していくとき、機能を満足できなくなった建築がその存在を維持していくのは、文化財的保存が行われる極めて少数の場合を除いては非常に困難である。実物保存を代替して建築文化の様態を保存して後生に伝えていくための手段としては、設計図書や実測図の保存のほかに、最も効果的なものが建築写真である。1960 年代以降の日本現代建築の優れた写真記録と 1960 年代における広範な民家の写真記録を行い、それを雑誌や『日本の民家 屋根の記憶』という書物として刊行し、それらを後生に伝えていくことを可能としたことは、日本建築学会文化賞にふさわしい重要な業績である。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。